

報



會

會 岳 山 本 日

16

月 六 年 七 和 昭

飛驒笠ヶ岳

小 島 烏 水

日本アルプス探検時代に於て、未だいくとも、山に登られてなかつたときに、笠ヶ岳は、一般に火山と信ぜられてゐた、それは農商務省地質調査所發行の、大日本帝國地質圖説明書(明治三十三年版)飛驒高原火山の部に、笠ヶ岳を入れてあるし、有名な志賀重昂氏の「日本風景論」(初版明治二十七年)には、燒嶽、笠嶽、硫黄嶽を、三つ並べて「信濃南安曇郡より、飛驒吉城郡に跨る、三嶽相連續して一大山塊をなす」といひ、「三嶽皆な安山岩より組成す、共に圓錐體にして、各々舊火山を存す」と説いてある、當時は「飛驒山脈」なる稱呼すら、未だ普及してゐなかつたらしく、志賀氏の如きは、飛驒山脈といふ稱呼を、一切用ゐないで、この山脈を、立山火山脈と汎稱せられた、それは立山、御嶽、乗鞍は素よりのこと、笠ヶ岳から薬師岳、五龍(後立山)、鹿島鍾ヶ嶽を、皆火山と信ぜられてゐたからで、薬師嶽には「甚だ齊整せる舊火山あり」と記されてゐる、これは今日の所謂カアルを、遠方から舊火山と誤認したものに見える。

笠ヶ岳の最初の登山記は、私の知つてゐる限りに於て、ウェストンの紀行を第一とするが、それに次いで、林並木氏が「山岳」第一年第三號(明治三十九年)に載せたのが第二であらうと思ふ、私が同山に登つたのは、ズツと後の話で、大正三年八月、双六谷を溯つて、双六岳に出て、尾根傳ひに笠ヶ岳へ出たが、笠ヶ岳も、槍、穂高と同じく、岩脈で、絶頂で拾つた岩片は、美事な流狀の構造を有してゐる流紋岩であつた、それも火山の一種であらうが、普通に活火山とか、休眠火山とかいふ意味に於て、火山とは違ふようだ。

併し私が、笠ヶ岳をこゝに持ち出したのは、火山、非火山の辯を、述べるつもりではない、實は槍ヶ岳の最初の登山者なる播磨上人が「飛州高山の東北、岩井戸村の山奥なる烏帽子ヶ岳に登りて、修行し、恙なく満願を終へ、それより同國肩ヶ岳に登り云々」と言はれた由を、或本に書いてあつたが、肩ヶ岳とは、何處の山だらうと、多年疑つてゐたのが、此頃漸く解つたことを言ひたいのである、長くなるから結果だけを話すと、笠ヶ岳は、山麓でカタヶ岳と説つて言つてゐる、カタは即ち肩で、播磨上人が親しく肩ヶ岳と書かれたのを、或書に肩ヶ岳と誤寫、もしくは誤植したのであつた、或は肩ヶ岳が正名で、笠ヶ岳の方が訛つて、今ではそれが、一般の通稱となつたといふような説を、誰やらから聞いたかと思つたが、確かでない、冠松次郎氏の著書「双六谷」にも、「笠ヶ岳は、肩ヶ岳といふ別名がある、その山頂を近く眺むるときは、笠よりも、寧ろ肩の形によく似てゐる、この名は、恐らく山麓の人たちが、その爲につけたのだと思はれる、然し今日

では、肩ヶ岳の名を用ふるものは、殆どないやうである」と書かれてゐる。序手に、播磨の笠ヶ岳登山は、今では確説で、一點の疑ひはないが、併し笠ヶ岳の第一登山者は、天明三年六月十八日、飛驒國宗献寺の南齋和尚等の、一行であつたことも、附記して置きたい。

アフリカの天然に關する文獻

八 代 準

近來吾人山奥仲間、今更アルプス・ロツキ・ヒマラヤ・アンデスでもあるまい、何かグロ掛つた所もがなと云ふ様な気分があつて、支那の奥地・中央アジア・アフリカ等に目をつける連中がボツ／＼ある様だ、昨年のベルギーのアフリカ探検には、日本からも學者や新聞記者が參加した様に聞いて居るし、最近吉田博士伯著の「高山の美を語る」(昭和六年六月廿四日實業之日本社發行)を見ると、其序の所に同氏は既にアルプス・ロツキ・ヒマラヤ迄も出掛けて行つたから、此次には是非アフリカの高山を寫生に出掛けたいと目論んでゐる」と云ふて居られる。吾々日本人が赤毛布式でなく、あまり日本人の行かぬ地方に進んで旅行する事は、誠に結構な事であつて、それが事業商業を目的としようと、學術研究又は單なる物見遊山スポーツ等を目的としようと、吾人の知見を廣め進取發展の氣風を養ふ點に於て、益々奨励してよい事であると思ふ、然し事前に其目的地に關し十分なる豫備知識を得て置く事が甚だ必要であつて、其巧拙は大に旅行の効果に影響するものであることは、人の皆よく知つて居る所である。

自分は昨夏新聞記事に表れたアフリカ探検の記事や寫真を見て、何となく物足らぬ様に感じ、又最近昭和六年七月五日野球界社發行の「山岳寫真大觀」の一六七頁にある、「世界の高山と其開發ロマンス」と題する、同社編輯局調査の記事の、アフリカの部を見たが、それにはキリマンジャロとケニアとルヴェンゾリが擧げてあり、ルヴェンゾリに關しては「山を完全に踏破した記録はまだ傳はらぬ」としてあるのを見て、吾々仲間、アフリカの天然に關する文獻を紹介して置く必要があるのではないだらうかと感じたのである。

前記山を完全に踏破すると云ふ、其完全と云ふ意味の取り様にもよるが、ルヴェンゾリに關しては伊太利の Duke of Abruzzi の探検を E. de Filippi 氏が一九〇九年に Ruwenzori an Account of the Expedition of H. R. H. Prince Luigi Amedeo of Savoy, Duke of Abruzzi (英譯の書名)と云ふ書物として發表して居り、可なり完全な記事が載せてあつて、其バノラマ寫眞の如きは實に見事なものである。之れはほんの一例であるが、アフリカの登山を決行するに際し、豫備知識を得るに如何なる文獻があるかを知る事が困難である様に思へる。

自分の友人に子爵徳川武定なる人があるが、同氏は非常な蔵書家で、特に工學物理數學に關する萬卷の圖書を藏し、戸定文庫と稱して居られるが、同氏が近年アフリカの天然に關する各種の文獻を蒐集せられ、既に約千卷に達して居り、中には貴重なる稀觀書も少なくない、探檢登山に關する多くの書物をも包含して居る、自分のアフリカに關する知識も、實は同文庫の御蔭でいろいろの書物を見せてもらったことから來て居るのである、そこで同子爵に御願して同文庫所藏のアフリカの天然に關する文獻目錄をタイプライターに打ち日本山岳會の圖書室に寄贈してもらう事にし既に其手續を了したから、會員諸君の御利用が自由である事、此所に御披露する、此目錄にある書物の或物は勿論一般の圖書館にもある事であらう、然し戸定文庫以外にはない様な文獻で、眞面目の目的のためには是非閱覽を要する様な場合は、相當の紹介を得て依頼すれば、見せてもらう事は不可能ではないと思はれる、但し徳川氏は山登りは愛宕山でもないやだと云ふ人であるから、山の話等聞いてもてんから受付けられないと云ふ事を御断りして置く。

附記。本項に掲出せられた文獻目錄——A Selected List of Books on Discovery, Exploration, Travel, Hunting and Field Natural History in The "Tojo-Bunko", 3rd edition, Sept, 1931. ——は本會圖書室にある。(編輯者)



會務報告

六月理事會報告

出席 評議員六名 理事十二名

一、イ本年度山日記の編輯經過

ロ登山團體パツヂ蒐集

ハ「山岳」本年一號經費決算

ニ小屋許可願の進捗程度

ホ「山岳」次號收載の原稿

右の諸項に關する報告ありたり。

一、本會にて本邦の山岳寫眞を蒐集し山岳寫眞帖を刊行する件可決。

一、「山岳」の合本用ケースの意匠形式決定したり。(別項参照)

一、入會申込の紹介者を會員二名のみにて足ることとする件可決。

以上

以上

(明治三十九年三月入會、會員章番號七〇) 去る五月三十日逝去せられたり。告別式當日は本會の名に於て花環を呈し小島會長本會を代表して參列せり。

本會々員後醍醐正六民(大正八年十一月入會、會員章番號七一一)は去る五月十八日逝去せられたり。

兩氏の訃に本會は茲に重ねて深く哀悼の意を表するものなり。

新着圖書

The Prairie Club Year Book 1932.
La Montagne C. A. F. No. 239
April 1932.

Butlet del Centre Excursionista de Catalunya C. A. C. Any XLII

No. 442—443 1932.

The Mountaineer Vol. XXIV No. 6 May, 1932.

Svenska Turistforeningens Arsskrift 1932.

" Turist Kalender 1932.

The Himalayan Journal Vol. IV Apr. 1932.

The Prairie Club No. 216 May, 1932.

Sierra Club Bulletin Vol. XVII No. 2 Apr. 1932.

Trail and Timberline No. 163 May, 1932.

Bulletin Appalachian Mountain Club Vol. XXV No. 8 May, 1932.

The Scottish Mountaineering Club Journal Vol. 19, No. 113 Apr. 1932

The Geographical Journal

Vol. LXXIX No. 5 May, 1932.

Die Alpen Vol. VIII. No. 5 Mai 1932.

Butlet del Centre Excursionista De La Comarca De Bages Any XXVIII MAIG 1932.

福島山岳スキー俱樂部編

吾妻、磐梯、五色、沼尻 勇林堂

水野祥太郎著

山野スキー術教本 黒百合社

山小屋 關西特報號 朋文堂

朽網 第一號 朽網山岳會

踏跡 第六號 東京登山旅行會

臺灣山岳彙報 第四年五、六號

岳友 第八九號、九〇號 日本岳友會

廣島山岳會々報 第五號

雪 四、五月號

東京アマチュアスキークラブ

ヘデスツリヤン 第一四〇、一四一號

關西徒步會

山の旅 第二八號 山の旅會

管見錄 第七八號 大阪管見社

山彦 第六號 東京山彦山岳會

明峯 第六號 明峯山岳會

リニツクサツク俱樂部々報 第六號

密贈圖書

務の旅 第一年一、二號(再版)

George D. Abraham: —

First Steps to Climbing 1923.

以上神谷恭氏

メモ(MEMO)二號

會報十五號に附録として、皆様の御手許に差上げて置きました風色の小さなカードの用途に就ては、茲に改めて説明申上ぐるまでもなく、つくに御承知の事と存じます。尚ほ

會員計報

本會名譽會員理學博士白井光太郎氏

號)三防(元山十二號)

昭和七年五月三十日

香妻・錦梯・五色・沼尻 福島山

岳スキー俱樂部編

其中に收録して御座います事項のすべては、毎月會報を御覽になれば御判りになることですが、時折圖書室の開室時日を間違えて來られる方があつたり、或は會費拂込期日を忘れて了つたり其他思ひ違ひなされる場合が御座いますので、こんな小さなメモを作つてみました次第です。

これを常にポケットにせられ、時折御注意下さいましたなら、前述のやうな御間違ひも起らず、至極御便利であらうと信ずる次第であります

メモ訂正

圖書室開室日——二段目書間、火木土は火木土日と御訂正下さい。

會報係



圖書紹介

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖 修正

眞壁(水戸十五號) 東京東南部(東京三號) 五日市(東京十四號)

五萬分一地形圖 鐵道補入

清水(静岡十號) 岩村(飯田十二號) 太田(飯田十六號)

五萬分一地形圖 修正

清道(大邱七號) 江西(平壤十一號)

號)三防(元山十二號)

昭和七年五月三十日

香妻・錦梯・五色・沼尻 福島山

岳スキー俱樂部編

廣範圍に互る山岳を一人の著者がまとめやうとする時は其處にどうしても無理が起る。特定の山を各々精通した方面だけを分擔して編纂したものはガイドブックの理想とするところだ。

この本は表題の示す範圍を十數人の人が筆を執り、内容は研究・紀行・隨筆に分れてゐる。五色・沼尻のスキー場が大眾の知る以外、此等の山岳の獨立した案内書がない折から、此の發行を喜びたい。多數の寫眞と概念圖の挿入されてゐるのも深切な編輯と思ふ。

六年十二月發行

東京神田錦町一ノ二仲好堂書店

四六版二四〇頁

一圓四〇錢

(Y・T)

氷河と萬年雪の山 小島島水氏著

日本アルプス四巻の出現以來、久しい待望の本が出た。氷河のクレツグアスを想はせる淡青色に銀で表したピツケルとザイルの圖案化した装釘が先ず眼をひく。内容は「米國の山岳氷河」に初まり、アメリカ東海岸の山岳の紀行、研究あり、日本の山岳に關する項も夥からず收載されてゐる。即日本アルプス縦横、槍ヶ岳の昔話、日本アルプス風景、日本アルプス雪蝕地形論、不盡の高根——其他

圖版四色版二葉、寫眞三七葉

六月發行、梓書房、四六版 四三〇頁 二圓七〇錢 (Y・T)

木曾駒に友をたづねて 大阪工業大學學友會山岳部發行

昨秋は穂高に、木曾駒に遭難が引つゞいて起つた。新雪の降る頃とて、搜索に非常な困難を伴つた事は新聞紙上並に、搜索隊よりの報告によつて知られてゐた。本書は昨秋十二月三日木曾駒に登つたまゝ、消息を絶つた右山岳部員井戸廣正、中川定治兩氏の搜索報告である。頂上の小屋へ行つたものか全く不明にて遂に死體は今日まで悲しくも發見せられなかつた。

右遭難に對する搜索記録、結尾、學内に於ける動靜、追憶あり、當時の事情を詳しく述べてゐる。搜索隊の歩いたコースを地圖に現してゐる事及び一切の費用を明細に發表してゐることは參考になる。(搜索期間は十日間、費用合計二四三圓九一錢)四月十日發行 菊版四五頁 地圖一枚 寫眞九葉 非賣品(Y・T)

關西學生山岳聯盟報告第三號 (一九三二年度)が近日中に發刊せらるる由、その内容は

△立山、白山附近

三月、大白尾根より劍岳(同志社)

杉本兒島兩代其他、冬と春との白山行(同志社) 榎本下岡兩氏、三月の

能郷白山(岐阜高農) 庄司柴田兩氏

△後立山附近

カクネ里登攀(京大) 平吉氏、冬の鹿島槍(甲南) 田口氏、唐松澤より牛首岳(甲南) 松野氏、ヒツタク澤よりの五龍岳(關大) 西島氏。

△北アルプス南部

錫杖岳、東尾根(神南大) 富川氏、北穂飛騨側(甲南) 伊藤氏、穂高瀧澤(京醫大) 谷氏、一月の前穂(甲南) 笹岡氏。

△南及中央アルプス附近

秋の木曾駒(三高) 大橋氏、三月の南アルプス(關學) 堀井氏、四月の南アルプス(同志社) 兒島氏、冬のハケ岳(大帝大) 小林氏、北岳バツトレス登攀(岐阜高農) 勝二氏。

△研究

富士山大澤口冬期登山報告(京大) 遠山氏、富士山吉田口冬期登山報告(神南大) 田中氏。

右の他聯盟ノート、挿圖、寫眞二十數葉、六月二十日發行の豫定、頒賃金壹圓也(送料十二錢)申込先は大阪市北區中ノ島大阪帝大山岳部内關西學生山岳聯盟事務所小林義郎氏宛 (Y・K)

「山岳服裝近代色」菅沼達太郎氏著

登山・スキー・キャンピングの服裝と用具の教科書と解釋するか? 初心者(同志社)の山行の第一歩に對する注意を

書いたものでもあるが、服裝と用具に特別に關心を持つ人の讀む本と思ふ。

「登山服裝の今昔」「ゲートル論」

「スキー服裝の今昔」等に獨特の生命と價值がある。

大村書店 一八〇頁 四六版

八〇錢 六月四日發行(Y・T)

「市野瀬・大河原」新版地圖

南アルプスの白峯、鹽見方面の地名、地形には驚くほど變化が起つてゐる。山名には若干贊成出來難い點もあるが、此修正版の發行は何しろ喜ばしい。大體昨年發行の登山圖「白根近傍」及び「赤石嶽近傍」を基としたもので、更に修正の筆が加えられてゐる。

五月二十日晴、二分(北魚沼上條村)より青雲を経て山頂岳岳に登る正午八十五度、麓は柳の芽はぐれ澤々には雪解の瀧が懸つてゐる、眺望なかなか良く燦々から佐渡迄見えたり案内人荒木五郎君の屍體が一週間程前に發見されたといふ網張の鞍部を経て前守門(一四三二米)に出て保久禮の小屋を経て栃堀に下る。

一昨年五月十六日に登つた時には青雲小池の畔に三葉ワレンがぼつぼつ咲いてゐたが今年は未だ雪に埋れてゐた。

頂上附近には残雪尙ほ二米突位、去る三月新潟第四銀行員七名が避難せる雪穴の痕が土俵の様に圓く残つて居つた。そこには竹の輪カンジキが片足とスキー杖の折れた尖端とが遺されてあつた。 小杉源吉

山の消息

殘雪の守門

大村書店 一八〇頁 四六版
八〇錢 六月四日發行(Y・T)

「市野瀬・大河原」新版地圖

南アルプスの白峯、鹽見方面の地名、地形には驚くほど變化が起つてゐる。山名には若干贊成出來難い點もあるが、此修正版の發行は何しろ喜ばしい。大體昨年發行の登山圖「白根近傍」及び「赤石嶽近傍」を基としたもので、更に修正の筆が加えられてゐる。

五月二十日晴、二分(北魚沼上條村)より青雲を経て山頂岳岳に登る正午八十五度、麓は柳の芽はぐれ澤々には雪解の瀧が懸つてゐる、眺望なかなか良く燦々から佐渡迄見えたり案内人荒木五郎君の屍體が一週間程前に發見されたといふ網張の鞍部を経て前守門(一四三二米)に出て保久禮の小屋を経て栃堀に下る。

一昨年五月十六日に登つた時には青雲小池の畔に三葉ワレンがぼつぼつ咲いてゐたが今年は未だ雪に埋れてゐた。

頂上附近には残雪尙ほ二米突位、去る三月新潟第四銀行員七名が避難せる雪穴の痕が土俵の様に圓く残つて居つた。そこには竹の輪カンジキが片足とスキー杖の折れた尖端とが遺されてあつた。 小杉源吉

新緑の木曾路より

五月二十四日中央線小淵澤にて駒ヶ嶽を描き新緑の木曾路に入り鳥居峠にて本曾駒の残雪やら新緑の峠路等数點の寫生畫を得て三十一日夜歸京す。

茨木猪之吉

立山より薬師ヶ嶽スキー行

五月十二日藤橋泊、途中觀た常願寺川の新緑美しく、鐵崎山は未だ冬の姿である、十三日彌陀ヶ原に到り弘法小屋泊、雪量は小屋附近にて約十尺、この日アナ小屋よりスキーを穿くことを得たり。十四日天狗平より室堂に到り雄山へ往復、室堂附近の積雪は二十尺以上もあらん僅か屋根の一部を露はすのみなりき。十五日一ノ越より龍王一鬼一シ、岳一ザラ峠より五色小屋に到りワシ岳往復、原の雪量は二十尺以上に於て素晴らしいグレンドを成す。十六日鷹岳一越中澤山一スゴウ乗越小屋泊、十七日薬師岳一太郎兵衛平一上ノ岳一黒部五郎岳に到り同所小屋泊、薬師より太郎兵衛平一上ノ岳にかけては特に愉快なスキーを愉むことが出来た。十八日三俣蓮華一雙六一樺澤山一西鎌尾根一槍ヶ岳一ノ俣小屋泊。スキーは槍澤小屋下まで使用出来たが一ノ俣小屋附近は最早雪を見なかつた。十九日上高地一澤渡一(自動車)一松本に出で歸京。

此行連日快晴に恵まれ、一日の滞在もせず面白い旅が出来、小屋生活も寔に愉快であつた。一行は芦峯寺の佐伯宗作、大野川の福島立吉と小

生の三名。

五月二十四日 (高田 茂)

臺灣花蓮港より

直立四千尺の素晴らしい岩壁を眺めて來ました。タロコ華は目下國立公園運動で活氣を呈してゐます。二三日後に關山越をする豫定です。

六月五日 沼井鐵太郎

南アルプス芦安口

古くから南アルプスの登山口として知られてゐる芦安村大曾利迄最近甲府驛から自動車が行くやうになつた。鳳凰、白峰方面への登山者のために非常に便宜を與へられたことを欣ぶ。

茨木氏山岳畫個展

五月十四日より五日間銀座の川島甚兵衛東京店階上に於て茨木氏の個展があつた。水彩畫五點、油繪四〇點、過去七、八年間に至る氏の作品が一堂に出陳されたものである。地藏、鳳凰、甲斐駒、八ヶ岳等を主題とせるもの多く、外に北アルプスのものも數點あつた。ほんとうに山を知る人によつて畫かれた一枚一枚の繪が、私達の心をとらえ、眼を奪つたのは當然過ぎる事である。見るだけでよい、このやうな山岳繪畫の展覽會が毎年一回位は開催されて欲しいと思ふ。

(Y.T.)



今年の「山日記」

- 一九三二年版の山日記が出来た。氣のついたことを一寸書いておく。
- (イ) 表紙は濃赤色のレザークロスにクリーム色で文字會章が押してある。中々氣が利いてゐる。
 - (ロ) 日誌欄が去年の青色の印刷から薄鼠色に變つたのもいい。
 - (ハ) 住所欄が附加された。
 - (ニ) 本邦山岳高度表が高度順に記載された。五十音順よりはやつぱしの方がいい。
 - (ホ) 峠高度表には朝鮮臺灣が附加された。日本にも三千二百七十二米に及ぶ高い峠があることを知つた。
 - (ヘ) 外國の峠が二十ヶ所附加されたカラコラム・パス五六九六米が一番高い。峠でも日本のは段が違ふ。
 - (ト) 山小屋の数は四百七十、去年のより百も増した。随分多いものだとい驚を喫せざるを得ない。
 - (チ) 山案内組合百二十、之も年々の調査で益々よくなつた。
 - (リ) 日程表も上越、東京近郊が新たに記載され、奥秩父なども大分訂正されたやうである。
 - (ヌ) 全國に散在する登山團體の調査

が載つた。之は中々面白い。よくもまあこんなに團體があるものと呆氣にとられた。

(ル) 警林署と林野局の所在地の載つたのは邊鄙な山について照會などするには都合がいいと思ふ。

我田引水に陥つてゐるかも知れないがその邊は平に御容赦を。(T.F.)

山日記の會員割引に就て

昨年通り山日記の會員割引を致します。一日も早く御申込み下さる様會員諸氏へ御願ひ申し上げます。

定價一圓、送料一部六錢

會員二割引送料共八拾六錢

申込先 本會事務所又は圖書室

備考 振替東京四八二九番を御利用願ひます。送金は申込と同時にこのと。

香園に於て、渡邊理事司會の下に開催左記講演があつた。

第五十五回小集會

六月十二日午後二時より清水谷皆△前穂高東面に就て、國鹽研二郎氏國鹽氏(帝大山岳部員)は松本高

校出身の關係上此方面に足跡遍く、昨夏遂に最後まで取殘されてゐた前穂高岳東面に於けるバットレスの初

登攀に成功されたことに就て、約一時間に亘て講演せられた。同氏は先づ潤澤側より前穂高北尾根第四、第

五峰の鞍部を踏んで奥又白谷に入行かれた人も多かつたとみえ、來會者比較的少く、會員二十七名、會員

外四名であつた。

(神谷)

費し、豫め降路を奥又白と中又白間に派出してゐる山稜上に定め、奥又白谷の源頭を攀じて遂に前穂高頂上直下三百米突と註せらるゝバットレスの初登攀に成功せられたあらましを、見事な寫真にスケッチを添へて語られた。尙最後に松本高校のバートイは、今年二月奥又白谷と中又白谷間の山稜を経て、前穂高岳に登頂した次第を發表せられた事は、來會者の興味をそゝること多大であつた。右講演の大意は、近く「山岳」誌上に發表せらるゝ筈である。

△高山の人體に及ぶ影響に就て

渡邊氏は高山の人體に及ぶ影響並に山岳病に就て、過去數十年間に於ける歐洲アルプス、コーカサス或はアンデス、ヒマラヤ等に試みられたエクスぺディションに於ける多くの著名な登山家に仍て實驗せられた文獻を基礎として、同氏の専門とされる醫學上より、約一時間中に亘て諄諄と説かれ、大いに益する所があつた。何れ詳細は「山岳」誌上に發表せられることであらうが、將來日本人に依ても大きなエクスぺディションが計畫されやうとする機運に向つて進みつゝあることを思へば、是等の問題に就ても豫め検討して置く事は、決して早過ぎることでは無いと思ふ。

當日は近頃稀らしい快晴で、山へ行かれた人も多かつたとみえ、來會者比較的少く、會員二十七名、會員外四名であつた。

(神谷)



「山岳合本用ケース」

- 1 上質バックラム(灰青色)
 - 2 背、山岳第何年、西暦を押す。
 - 3 ヒラは両面に會章を押す。
 - 4 前後見返し灰木畫伯筆。
 - 5 一年分合本用ケースのみを所用の場合。五十錢(送料本會負擔)
 - 6 雜誌を本會へ送付され製本して返送する場合。ケース・製本料共一圓(返送料本會負擔)
 - 7 申込及び「山岳」送付先は芝區琴平町一・不二屋ビル日本山岳會
 - 8 送金は振替又は小爲替或は郵券(二錢切手)代用に願ひます。
- 會報編込用表紙(カッター参照)
- 1 ヒラは濃緑色レザー。會章押捺
 - 2 背は濃紺色クロス。
 - 3 申込は芝區琴平町一不二屋ビル
 - 4 代金は四十錢(送料本會負擔)

會報係

特製繪葉書頒賣のお知らせ

先日會員諸氏のお手許にお届けしました「山岳」第二十七年第一號の扉繪(きぬがさ草・圖案)は、本會會員にして帝國美術院審査員たる石崎光瑤氏の揮毫を煩はしたものを斯界に定評ある高見澤木版製作所に於

て製版印刷したのであります。このたびこの扉繪をそのまゝ、別渡日本紙の繪葉書に作らせ實費を以て皆様に頒けすることに致しました。山旅のたよりに、日常の通信に、殊に海外への音信にお使ひになれば大變喜ばれることと思ひます。印刷枚數五百枚の盡きない内にお購め下さるやうお勸め申し上げます。一枚五錢

圖書基金に就てのお願い

本會の圖書基金が昨年度に於て四十五名五十九口の御申込を得ましたことは本會特に圖書係の深く感謝する所であります。

右の圖書基金を以て夥からぬ和洋山岳圖書を購入し、各國山岳會誌及び本邦登山團體の會報を合本整理することが出来たのであります。

然しながら圖書室の内容を充實せしむるにはまだ多くの費用と時間と努力とを必要とします。本會の圖書室を豊くとも本邦に於いて最も完備せる山岳圖書館たらしむるため此の上とも會員諸氏の御後援を願ひ致したいと思ひます。

從來圖書基金の御出捐を願つてゐました方々へは別に書狀を差上げることと致しますが、この會報上を以て尙篤志の會員諸氏に圖書基金の御出捐をお願い致す次第であります。

昭和七年三月

圖書係

(松方・伊藤)

追而御申込の形式は左の通りであります。

日本山岳會圖書基金申込書

一、昭和七年度圖書基金何口何圓也
(但し一口年額金五圓)

右申込候

貴名

日本山岳會御中

御申込書丈けを先きに頂戴して後日御拂込み下さつても結構で御座います。

編輯後記

前號の發行が遅れた事は申譯なかつた、その爲に六月は會報が二回發行された事になつてしまつた。今後は出来る限り毎月一回の發行は守つて行きたい。

本號に小島さんの玉稿をいたゞいた事は編輯者の大きな欣びである。原稿の不足が最も發行に支障を起す原因である。隨筆、研究、消息或は編輯に關する注文をどゞし送られん事を切望する。

今年の山日記は印刷上の手違ひなどで大變發行が遅れてしまつた。一人でも多くの會員が新裝の山日記をルックに入れて夏山に行かれる事を願ひます。

(角田)

會員章をつけて下さい

山に登られる時

小集會に出席される時

集會室圖書室に來室される時

會員章をつけて下さい

昭和七年六月二十四日印刷
昭和七年六月二十五日發行

發行係

角田 吉夫

發行所

東京市芝區琴平町一不二屋ビル
日本山岳會
會報編輯所

(印刷部整理部)

ルックザックは片桐へ！
登山具

キスリンク型	七五〇—一〇〇〇 ^円
スキー型	八五〇—一二〇〇
スキー用小型	二五〇—三五〇
ウイントヤツケ	五〇〇
羽根入シユラーフザツク	二四〇〇
シール	二五〇—六〇〇
ゾームシール	七〇〇

▲スウイスからビツケル・ザイル・シユタイクアイゼン入荷致しました。

▲何卒御用命下さい。

片桐テント登山具店

神田區今川小路二ノ四
(今川小路電車停留所前)

一九三二年版
日本山岳會編
(増刷出来)



△體裁 菊半截三九二頁

海老茶レザークロース

裝 寫眞八葉

△定價 壹圓 送料六錢

△部數 本年度發行部數僅少に

付至急御購入を乞ふ

山岳寫眞繪葉書

武田久吉博士撮影

第二輯 雪の尾瀬

武田久吉博士撮影

第三輯 春の白馬

武田久吉 撮影

第四輯 上越國境

七月初旬出来(各二十錢送料二錢
郵券拂込可)

東京市神田區北甲賀町四番地

梓書房

電話 神田二七七五番
振替東京七六四四番

山岳關係圖書販賣目錄(一)

リニツクサツク	針葉樹	自一號	早大山岳部報	三〇〇	山水河及湖澤	志賀重昂著	三〇〇
山一號寫眞	山一號	自一號	商大山岳部報	三〇〇	ヒマラヤ行	鹿子木員信著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	法政山岳部報	三〇〇	高山植物	武田久吉著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	慶應體育會山岳部	三〇〇	水彩寫生旅行	大下藤次郎著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	松高山岳部報	三〇〇	高山表紙汚	高島北海著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	五、六號	三〇〇	植物信濃の花	田中真一著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	二、四、五號 四高山岳部報	三〇〇	世界寫眞圖說(雪)	志賀重昂編	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二號 關東山岳會	三〇〇	富士案內	川井運吉著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三號 農大山岳部報	三〇〇	富士百景	渡邊新三郎共編	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四號 關東山岳會	三〇〇	山研究	河野齡藏著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	矢野澤三郎著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	南九州山岳會編	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	大島勝太郎著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	田部重治著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	武田久吉著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤田九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	柳田泉著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	平賀文男著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	辻村伊助著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	三木高嶺著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自二十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自三十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自四十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自五十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自六十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自七十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自八十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十一號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十二號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十三號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十四號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十五號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十六號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十七號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十八號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自九十九號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇
山一號	山一號	自一號	自一百號 關東山岳部報	三〇〇	山研究	藤木九三著	三〇〇

△賣切の際は暫く御猶豫願ひますれば御間に合せ致します。
△當記載品の外に山岳書は多數持ち合せて居りますから陸續
御註文の榮を賜ります。

△夏季登山シーズンが参りました。現在刊行山岳書は全部取
揃へて居ります。
△一般古書御拂下の際は是非巖松堂へ御用命下さい。

東京市神田區中猿樂町
巖松堂書店古典部

電話 九段長
振替 東京
番番番
五七六
三三五
一四五
四四六

大村書店



太陽レコード

新發賣

山岳の歌

明るいメロデー
華麗な伴奏
碧い空、白銀の峯
山を戀ひ、山を慕ふ
純真の山岳歌

小澤義正作詞
千振勘二作曲

南アルプスの歌 一枚
歌手 吉見 治男
伴奏 太陽オーケストラ

日本山岳會々員
小西民治作詩
三條 昇作曲

北アルプスの歌 一枚
歌手 松江 三郎
伴奏 太陽オーケストラ

○お買上は全國到處の蓄音器店にて
て萬一品切れの場合はお手数なが
ら直接本社へ(定価以外荷造送料
費三十錢二枚迄)代金引換へにて
御送附申上げます
○歌詞曲譜は郵券二錢同封にてお申
越しありまし

東京丸の内衆議院正門前
太陽蓄音器株式會社
振替 東京 四九五二番

一本 日 円 壹 枚 一

登山とスキー

隔月偶數月發行

編輯同人

小笠原 勇八 小島 六郎
鈴木 勇 渡邊 公平
森田 勝彦

主要記事

- 第一號。アルビニズム(書上喜太郎)テイロール紀行(シュネーハーセ)登山綱の使用に關するヒント(藤木九三)スキー登山家の眞正なるスキー術獲得の爲に(高橋次郎)
- 第二號。山と人生(チンメルマン)老アルビニストの夢(高野鷹藏)ツイグモンテイ小傳(小出博)カメツト峰の登高史(藤木九三)
- 第三號。山と漂泊(伊藤秀五郎)街の登山者は語る(高橋文太郎)名登山家の片鱗若きマロリー(小出博)私の冬山單獨行(加藤文太郎)
- 第四號。明日の登山の爲に(水野祥太郎)播隆院護持佛の發見に就て(笠原鳥丸)ヒマラヤの登山史(福田雄)ジャンダルム飛驒尾根(伊藤憲)
- 第五號。(秋の山想特輯)ウェストンの「日本アルプス」邦譯(小嶋鳥水)登山意識の把持についての一試論(辻莊一)紅葉の奥秩父(田部重治)古典レヂスタ(榎谷徹藏)
- 第六號。(冬山とスキー特輯)スキー廻轉法の體系に就て(水野祥太郎)冬季高峻山脈スキー登山(舟田三郎)シュナイダーをアルベルガに訪ふの記(齋藤由理男)最近の冬山とスキーを語る座談會(著名山岳家七氏)
- 第七號。山の日本魂(小笠原勇八)アルビニズムの私見(栗田直躬)第一・二次雪崩の非定型的發生の問題(水野祥太郎)どんな戰術でカメツトに登つたか(藤田信道)
- 第八號。(春の上越特輯)山のヤングセネレ(シヨン)(小笠原勇八)山岳小説「謎の墜死」(山上雷鳥)スキー競技會を顧みて(小川勝次)春の上越(六篇)

神田區駿河臺下

木村ビル

アルビニズム社

振替東京五九三三七番